



Vol.2

対談

2021年度審査委員

内田まほろ × 鈴木元 × 飯石藍

グッドデザイン賞審査委員に聞く  
激動の社会で、変わるデザインの意義とは？

# いま、変化する グッドデザインな 関係性



## 受賞者インタビュー

分身ロボットカフェDAWN ver.βと分身ロボットOriHime  
(株式会社オリイ研究所)

移動型X線透視撮影装置  
FUJIFILM DR CALNEO CROSS  
(富士フイルム株式会社)

石巻工房  
(株式会社石巻工房)



# オリィ研究所 分身ロボットカフェDAWN ver.βと分身ロボットOriHime 操縦する人の思いをのせて動く「OriHime」 分身ロボットが紡ぐのは誰も取り残されない社会

難病などで外出困難な人たちの問題解決ツールになると審査委員に高く評価された、分身ロボットカフェDAWN ver.βと分身ロボットOriHime。そのコンセプトの根幹には、人間誰しもが持つ出会いへの欲望を支援したいとの思いがあった。



「分身ロボットカフェDAWN ver.β」で接客をおこなう「OriHime-D」。一見したところAIに見えるが、生身の人間が操縦している

## 人間の意思をもって動く 分身ロボットが集う場所

新日本橋駅から徒歩すぐの場所にある、天井高の空間。一見すれば普通のカフェの印象だが、カウンターでは分身ロボット「OriHime」が注文を受け、また身体労働が可能な「OriHime-D」がテーブル席の客にドリンクを届けるなど、未知なる光景が広がっている。カフェ、ひいては「働く」という言葉の概念を覆すのが、ロボットと人間が共存するここ、『分身ロボットカフェDAWN ver.β』なのである。

これらのロボットはAIでなく、生身の人間が動かす。操作するのは、ALS(筋萎縮性側索硬化症)などの難病、もしくは

重度障害などで外出が困難な人たち。病床にある患者でも、離れた場所からスマホやタブレットなどで容易に操作できるのが「OriHime」の優れた点だ。仮に病状が進んだ場合は、目の操作、くわえて事前に収録した音声を駆使して接客することも可能。また訪れた客が、その奥にいる人間に接客されていると感じられるように、ロボットのデザインにも工夫が施されている。登録されたモーションと自由に動かせる腕が、操作する人間の感情を自然と伝えてくれるのである。

このカフェで大切なのは、ロボットの向こうの人間の気持ち。「動けないが、働きたい」との意欲ある人々とともに、外出困難者でも社会参加できる方法を研究することを最終目標としている。社会経験の少ない障害者の就業訓練の場としても活用され、企業での恒常的な就労にもつながっている。



「分身ロボットカフェDAWN ver.β」は、2021年6月に東京・日本橋にオープンした



自宅や病床にいても、スマホやタブレットを使えば「OriHime」を介して接客ができる

## 人間の根源的な欲望である 「会いたい」を応援する

このカフェを立ち上げたのが、株式会社オリィ研究所。代表取締役の吉藤オリィ氏は、2010年に早くも「OriHime」初号機を完成させたというが、その源流には「寝たきりの先にある生活を創造したい」との思いがあったという。

「私たちは生きていくなかで、いつ身体障害者になってもおかしくありません。また老後を迎えて身体が動かなくなったとき、『OriHime』のように自宅や病院から遠隔操作できる“もうひとつのカラダ”が存在すれば、新たな発見を繰り返せる。生きがいを維持することが可能だと考えました」。

健康寿命と平均寿命の間に10年の開きがある日本。いかにして最後まで人間らしく生きるかという問題には、誰もが直面するだろう。「OriHime」が分身となることで、離れた場所で出会いを創出したい——。吉藤さんの思いのもうひとつの源流には、自らの体験があった。「私は小学校5年生から中学校2年生までの3年半、不登校でした。ずっと家族以外の人とは会わずらく、孤独に苛まれていました。あの頃の自分には戻りたくない。だからこそ同じような状況にいる人に救いの手、社会とつながる方法を提供したいとの思いはあります」

『分身ロボットカフェDAWN ver.β』で働くのは、なにも身体が不自由な人だけに限らない。子育て中で自由に外出できないとの理由で、遠くオーストラリア・メルボルンから出勤する女性もいる。あらゆる人の分身となって、社会との接点を生み出す。そのためのツールが「OriHime」なのだ。

また“テレパリスト”なる「OriHime×NEXTAGE」は、手先を使った作業が可能で、注文に応じてコーヒーを淹れる。元・パリストのALS患者の「また働きたい」との思いを受け、オリィ研究所と川田ロボティクスが共同開発した。テクノロジーやデザインは、「よりよく生きたい」と願う人間とともにある——。このカフェは、ものづくりの原点に帰れる場所だ。

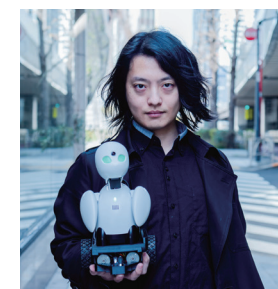


広告のモデルになっている脊髄性筋萎縮症2型の永廣 証氏は、「分身ロボットカフェDAWN ver.β」で接客デビューを果たした

「OriHime」は  
さまざまな人の  
“会いたい”を  
叶えているんだね。



GOOD DESIGN  
について考える人  
Gくん



株式会社オリィ研究所  
吉藤 オリィさん

小学校5年から中学校2年まで不登校を経験。その経験をもとに早稲田大学在学中に分身ロボット「OriHime」を開発。「孤独の解消」をミッションとし、2012年オリィ研究所を設立。米Forbesが選ぶアジアを代表する青年30名、文化庁メディア芸術祭など、国内外で受賞多数。



# 富士フイルム株式会社 「FUJIFILM DR CALNEO CROSS」

## 1分1秒を争う手術現場で 素早く命を救う移動型X線透視撮影装置

少子高齢化が進む日本では、患者と医療従事者の心地よい共存が期待される。『富士フイルム』が発売した画期的な機能を備えた「移動型X線透視撮影装置 FUJIFILM DR CALNEO CROSS」には、現場の負担軽減を願う社員の思いが溢れている。

患者さんと  
医療従事者の  
よりよい未来を紡ぐべく、  
富士フイルムの技術が  
活用されているね。



※実際の施術シーンの画像ではなくプロモーション用の画像です

上/回診車と外科用Cアームの機能を兼ね備える。本体重量は約249kgと軽量・コンパクト化を実現する。右/手術中は幅広い受像部等を使い分ける等駆使して、素早いアプローチが可能。

## 手術の現場の負担を軽減 ハイブリッドなX線撮影装置

古くはインスタントカメラ「写ルンです。」、またコンパクトデジタルカメラ「FinePix」など。『富士フイルム』といえば、写真、カメラの印象が強い。しかし、それらイメージングと呼ばれる分野以外にも、手がける事業はバラエティ豊かだ。写真で培ったサイエンスをスキンケアに応用した化粧品「アスタリフト」などのメディカル事業にも力を入れ、しかもここまで挙げたプロダクトは、いずれもグッドデザイン賞を受賞。また2021年度には、『富士フイルム』の幅広い事業分野における34製品が、グッドデザイン賞を獲得する快挙も成した。

そして2021年度グッドデザイン金賞に輝いたのが、「移動型X線透視撮影装置 FUJIFILM DR CALNEO CROSS」。これは端的に言えば、“レントゲン”で、おもに手術室で使用する。

手術をおこなう際は、患者の身体内部の骨、臓器、血管などを透視するのが一般的で、X線透視動画撮影機能を備えたCアームが活躍する。一方で術後には、患者に正しく処置がなされたか、静止画撮影可能なX線回診車をもって確認する必要がある。

つまり医療の現場では、術中に動画を撮影する“外科用Cアーム”と、静止画専門の“X線回診車”の2台で対応することがほとんどだったが、この“当然”を変えたのが、「FUJIFILM DR CALNEO CROSS」。動画も静止画も撮影できるハイブリッド型で、医療現場の負荷を軽減する。

## 一刻を争う手術の現場で 迅速に命を救うために

『富士フイルム』がこの革新的なプロダクトを生み出したのは、1934年の創業直後、1936年よりレントゲンフィルムを手がけてきたからだ。「FUJIFILM DR CALNEO CROSS」には、その技術を生かして開発したデジタルX線受像パネル「FUJIFILM DR CALNEO Flow」（こちらも2021年度グッドデザイン・ベスト100を受賞）が採用され、同社デザインセンター・プロダクトデザイングループ・デザインマネージャー 小倉良介氏は、「この『Flow』があってこそ、『FUJIFILM DR CALNEO CROSS』は生まれた」と話す。

「パネルを取り外して付け替えれば、動画も静止画も撮影可能。またパネルのサイズは3パターンあるため、四肢、脊椎、股関節など、撮影する部位によって大きさを変更できます。1台でさまざまな撮影がおこなえ、患者さんと医療従事者の負担軽減につながると考えます」

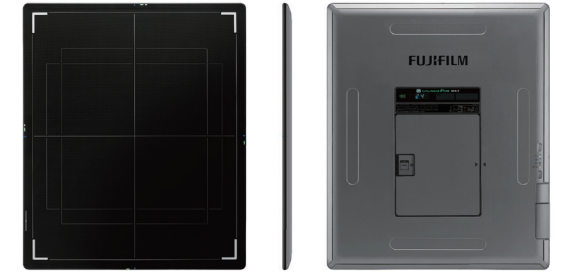
マシンの配色にも、常識を変えたいとの思いがにじむ。

「『圧迫感がない』『恐怖を抱かせない』との理由で、医療機器は白色が基本です。でも『FUJIFILM DR CALNEO CROSS』は、黒とシルバーでまとめました。2台の機能を1台にしたこのマシンは、1分1秒を争う手術現場で、先生たちが素早く命を救うための助けとなる仕様になっています。操作者が目にするディスプレイやステータスLEDは黒の背景の方が見やすく、患者さんの目に留まる部分には凹みや傷が目立たないシルバーを採用しています。他にもコンパクト・軽量化、電源ケーブルレスなど、いかなる現場でもストレスの少ないデザインとUIになっているんです」

## 未来についての想像力が 誠実なデザインを紡ぐ

いつの世も『FUJIFILM』の製品が兼ね備える、ユーザーの潜在的なニーズを満たす「誠実なデザイン」。それらを生み出すために、早い段階で商品、サービスのあるべき姿を可視化するように努めている、と小倉氏は話す。

「その目的の達成のために、製品の開発初期からデザイナーが関わる案件が増えました。ただしそのあるべき姿の可視化には、ビジョンが必要。私は将来の医療の姿を思い描いて、業務に当たっています。そしてそのイメージを、たとえば動画にしてメンバーと共有する。皆でビジョンを分かち合うことで、未来の可視化は案外スムーズに進むんですよ」



パネルの軽量化と高画質を実現。静止画に加えて、透視用の動画生成機能も搭載した「FUJIFILM DR CALNEO Flow」。撮影面に各種LEDを配置して、清掃性にも優れたシームレスなデザインとなっている



『富士フイルム株式会社』のCLAYデザインスタジオの棚に置かれた、過去のグッドデザイン賞の表彰盾の数々



『富士フイルム株式会社』プロダクトデザイングループ・デザインマネージャーの小倉良介さん。手元にあるのは、「FUJIFILM DR CALNEO CROSS」のミニチュア模型



富士フイルム株式会社  
プロダクトデザイングループ・デザインマネージャー  
小倉 良介さん(左)  
プロダクトデザイングループ・デザイナー  
大野 博利さん(右)

小倉氏・大野氏が所属する同社では、2017年5月「新しい富士フイルムをデザインする」を掲げ、CLAYデザインスタジオを開設。社内の企画者・技術者・研究者、社外のクリエイターなどと共創する拠点となっている。



## 石巻工房の取り組み

### 震災復興につながる「Do It Yourself」を目指して 誰でも組み立てられるツールを開発

東日本大震災からの復興を願って、人々が知恵と労力を注いだ10数年。2021年度のグッドデザイン賞とロングライフデザイン賞に輝いた宮城『石巻工房』は、被災者とデザイナーがDIYの精神でつながった、誰もが参加できるものづくりのプロジェクトだ。



仮設住宅では縁側で腰掛けとして活躍した「ISHINOMAKI BENCH」(左)、横から見るとアルファベットの“A”にも見える「AA スツール」(中央)、工房の代表作「ISHINOMAKI STOOL」(右)

### “復興”ではなく、“復旧”から その一歩を踏み出させたDIY

東日本大震災の際に、巨大な津波に襲われた石巻市沿岸部。かつては魚市場、くわえて水産加工会社が多く存在し、市の経済を支えていた一帯だ。しかし震災の津波で、その多くは損壊・流出。現在、『石巻工房』の家具工房となっている場所は、奇跡的に被害から免れた元・ワカメの乾燥工場、周辺には新たな住宅地が造成され始めている。

『石巻工房』が誕生したのは、2011年の震災直後だ。3.11当時は、石巻市内の商店街で船職人として働いていたという、工房長の千葉隆博氏。デザインの世界と関わるきっかけは、共同代表でもある建築家・芦沢啓治氏との出会いだった。

「同級生が営む割烹のリノベーション担当が、芦沢だったん

です。震災後には芦沢が、それまで石巻と縁のなかった建築家やデザイナーなど、さまざまな得意分野を持った人をボランティアで連れて来ました。石巻以外からの来訪者がいなければ、『石巻工房』の創業と今の復旧はありえませんでした」

だが各界のプロが集結したといえど、ライフラインが全て止まり、復旧への道は当初から真っ暗闇だったという。

「人材も建材も不足していました。けれども商店街にある居酒屋のDIY好きのオヤジさんがすべて自分で修繕して、電気が復旧する前に、店を再開させました。それを見て、“復興”はできなくても“復旧”はできると勇気をもらえたんです」

復旧が進むなかで、復興を目指す人たちが交流する“復興バー”なる憩いの場を作った。また「石巻川開き祭り」が開催される8月には、有志で結成した「ISHINOMAKI 2.0」によって、野外での上映会が企画された。

「被災したビルの壁をスクリーンに使うことにしました。



工房では地元の木工職人が活躍する。『トラフ建築設計事務所』など人気デザイナーが設計したツール、また「カリモク家具」とコラボレーションした製品もある

『上映会には座れるものが必要だ』との話になって、芦沢が組み立てやすいベンチのデザインを考え、それを石巻工業高校の生徒さんが50脚ほど制作してくれたんです。このときのDIY精神は、今も『石巻工房』に受け継がれています」

### 被災地で生まれたツールが 世界の人々を笑顔にする

その後、“地域のものづくりの場”として『石巻工房』が創業するなかで影響を与えたのが、アメリカの家具会社『ハーマンミラー』。『石巻工房』の代表作「ISHINOMAKI STOOL」は、同社が仮設住宅でおこなったワークショップのために芦沢氏がデザインした、“ビールケース”と同じ高さのツールだ。

「ハーマンミラー社が仮設住宅での生活をリサーチしたところ、棚の物を取る、また玄関で靴を履くときに、住民がビールケースを使っているのに気がつきました。同じ高さの椅子があれば、喜んでもらえると考えたんです」

ワークショップでは、ツールをDIYで完成させた人には無償で提供した。自分たちでできることは自分たちで——。復興に向けて必要な気概をみんなで育みたいとの思いから、あえて使用する人自身でツールを作ってもらったのだ。

「組み立てやすいように、接合部は簡単なネジ止め。震災直後でも入手しやすく、頑丈なツーバイ材を使用しました。この“ネジ止め”と“規格材使用”は今も当社の製品に共通する仕様です。一から組み立てるキットもあります」

デザインは問題を解決するためにある——。千葉氏が『ハーマンミラー』の担当者と話して、印象に残った言葉だ。仮設住宅の人々の不便を解消した、石巻工房のツール。今や日本全国や世界でも歓迎され、大手IT企業のオフィスや海外カフェチェーンでも、快適さや座り居心地のよさを与えている。



工房近くの場所に2020年に開業した「Ishinomaki Home Base」。1階はカフェ兼ショールーム、2階には工房ゆかりのデザイナーがデザインした客室があり、ゲストハウスとしても活用する

被災地に笑顔を生んだツールが  
世界でも評価されているんだね。



株式会社石巻工房  
千葉 隆博さん

1972年宮城県石巻市生まれ。高校を卒業後、ログビルダーを目指して建築の道に進むも、家業の鮭店で約20年間、船職人として従事。2011年の津波によって店舗は全壊。その後、共同代表である芦沢啓治と知り合い、趣味で培ったDIYスキルを見込まれ、石巻工房に関わることに。鮭店は父親が再建。繁忙期には、バイトとして板場に立つことも。



# 時代や社会の変化と歩んだ グッドデザイン賞の60年。

グッドデザイン賞は、1957年に創設された  
日本で唯一の総合的なデザイン評価・推奨の仕組みです。  
私たちの暮らしをつくる「よいデザイン」を、審査を通じて発見、  
Gマークとともに広く共有することで、新たな創造への気づきを生んできました。

## Gマークとは

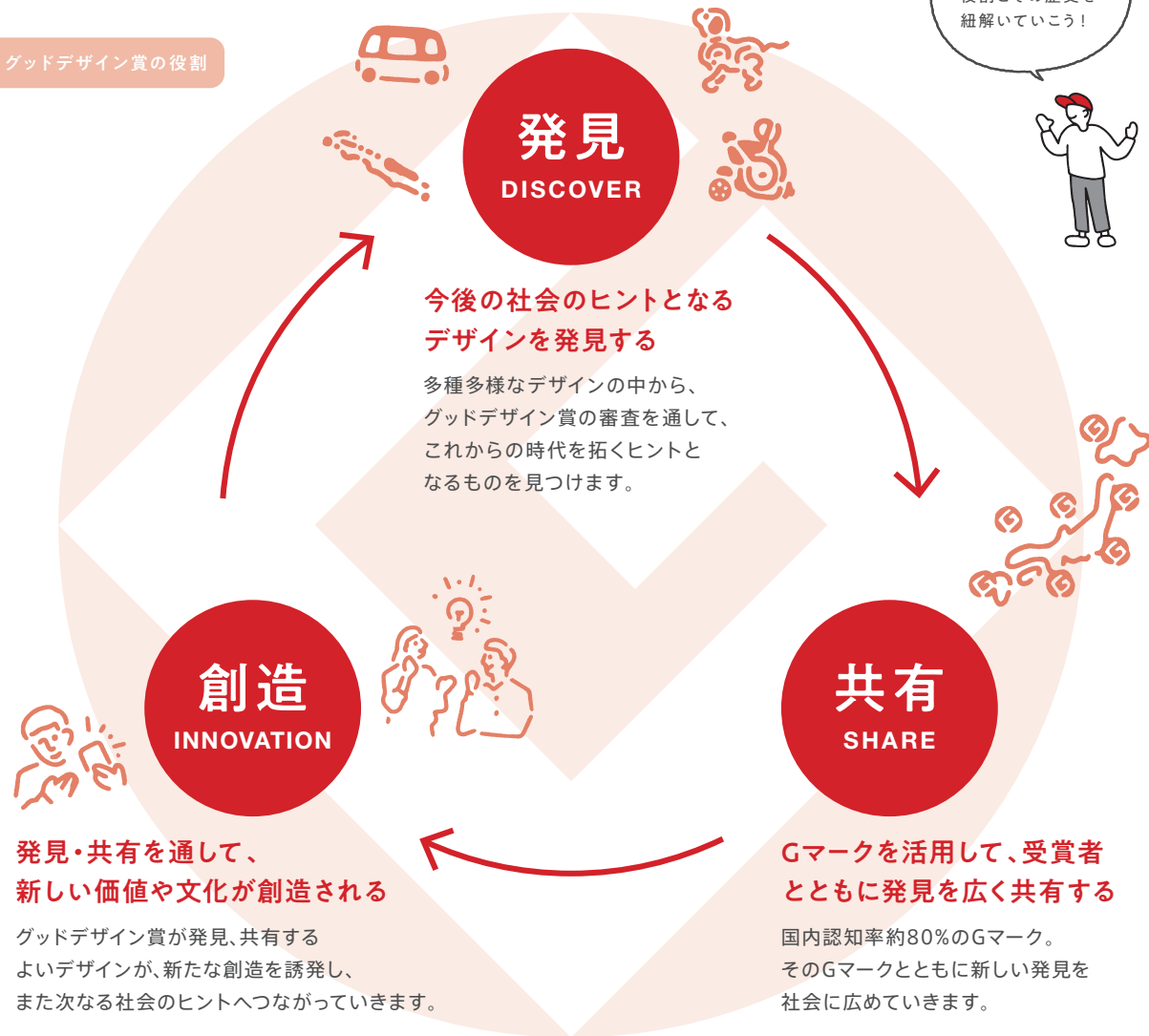
Gマークは、グッドデザイン賞の前身である「グッドデザイン商品選定制度」が発足した1957年に亀倉雄策氏によってデザインされました。以来このマークは、産業と生活を結ぶ信頼の証として親しまれています。



グッドデザイン賞の役割とその歴史を紐解いていこう！



## グッドデザイン賞の役割



## 発見・共有

### GOOD DESIGN AWARD

#### 応募・・・発見

グッドデザイン賞は、あらゆる分野のデザインを有形無形問わず対象として応募を受け付けています。



#### 審査・・・発見

書類による一次審査、展示された現品を確認する二次審査を実施。応募対象を1点づつ手に取りながら審査を行います。



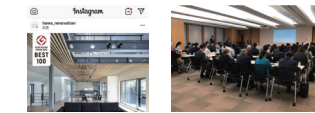
一次審査(書類審査) 二次審査(現品審査)

#### 発表・・・共有

毎年秋に受賞デザインを発表します。Gマークとともに、優れたデザインが持つ価値や意味を広く社会に共有していきます。



受賞展 受賞祝賀会



Gマーク活用 記者発表

## 数字でみる GOOD DESIGN AWARD

SINCE  
1957

1957年の創設以来60年以上にわたり、暮らしと産業、そして社会を豊かにする「よいデザイン」を顕彰し続けています。

年1回の応募制で開催され、いまでは世界45の国と地域からデザインが集まっています。  
※2009年度以降の累計

参加国・地域  
45

グッドデザイン賞の対象は、あらゆる領域にわたり、受賞数は毎年約1,400件、過去65年間で約50,000件に及んでいます。

これまでの受賞件数 **50,000** 件以上

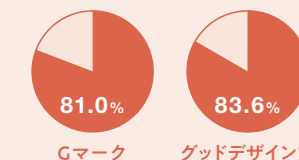
審査委員数 **90** 人  
国内外のデザイン界を代表するデザイナーや建築家など約80名の専門家が審査。幅広い分野の専門家が集まり、さまざまな視点から選考を重ねています。

### 2021年度実績

受賞件数 **1,608** 件

審査対象数 **5,835** 件

### 国内に認知率



### Gマークのイメージ

魅力的なかたちをしている……… 68.7%  
機能・性能が優れている……… 57.9%  
品質がよい……… 37.7%

### 受賞企業のイメージ

センスがよい企業……… 62.6%  
ものづくりが上手な企業……… 58.5%  
時代をリードする先進的な企業……… 34.4%

※全国の15歳以上男女2,100人への調査結果。2020年2月実施。

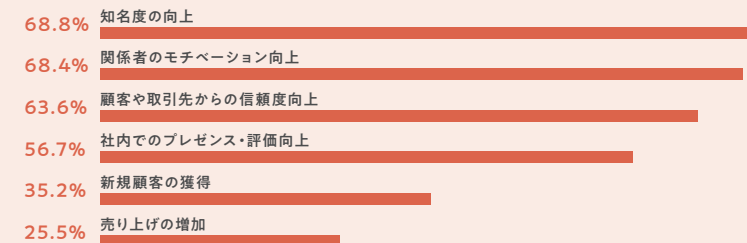
### 受賞者アンケート

受賞者に行ったアンケートでは、Gマークの高い国内認知度をはじめ、日本のデザインを支えてきた歴史と実績から得られる様々な効果の声がありました。

#### <グッドデザイン賞 応募回数>



#### <受賞による効果>



※2021年11月実施 n=247

## グッドデザイン賞の歴史

1950  
第1フェーズ  
復活の時代

戦後の高度経済成長期、質が最優先の日本独自のデザインが海外でも花開く。

1970  
第2フェーズ  
ジャパンオリジナルの時代

ウォークマンやホンダのシビック。世界をも驚かせる日本のデザイン。

1990  
第3フェーズ  
価値変化の時代

グッドデザイン賞が大きく刷新。デザインの領域もモノからコトへ。

2000  
第4フェーズ  
価値多様化の時代

変わり続けるデザインの概念

2010  
第5フェーズ  
共有の時代

変わり続けるデザインのかたち



## 第1フェーズ

# 復活の時代

戦後の高度経済成長期、質が最優先の日本独自のデザインが海外でも花開く。

1957年に生まれたグッドデザイン賞。同時期には松下電気産業や東芝などの日本企業がデザイン部を設置。デザイン熱の高まりを受け、1963年にGマーク制度は公募形式になります。その評価方法も次第に商品トータルの質を見極める方向へと転換し、Gマークはクオリティの高い商品を示す基準に。

一方、経済に目を向けると、1964年の東京五輪を機に「いざなぎ景気」が起こり、新・三種の神器と呼ばれる車、エアコン、カラーテレビが普及します。デザインと質の伴った製品は海外にも順調に輸出され、日本は経済大国へと成長。<グッドデザイン奨励制度>の発展と歩みを同じくして、日本は戦争で失ったアイデンティティを取り戻していったともいえます。

# 1950-



1958 電気釜 RC-10K 株式会社東芝(東京芝浦電気株式会社)

デザイン:同社 岩田義治

「お釜」をモチーフにした清潔感のあるこのフォルムは、商品としての成功以上に、日本人の基本である「米を炊く」行為そのものを大きく変化させ、新しい時代が開かれようとするシンボリック役割を果たした。日本の生活環境から生まれたオリジナリティある優れたデザインの1つである。

## 第2フェーズ

# ジャパンオリジナルの時代

ウォークマンやホンダのシビック。世界をも驚かせる日本のデザイン。

1970年代にオイルショックを経験した日本。経済政策もそれまでの生産第一主義、輸出貿易重点主義から、国民生活の質的向上へと舵を切られます。この変化のなか、1979年にソニーからウォークマン、1983年に本田技研工業からシビックが発表され、唯一無二の日本の工業製品とデザインが、世界でも熱狂をもって迎え入れられます。こうした時代をリードする先進的なデザインを顕彰すべく、Gマーク制度にも1977年に「部門別大賞」を選ぶ特別賞、1980年にその年を象徴するデザインを選ぶ「グッドデザイン大賞」が設置。また1984年には、さらなる生活の質の総合的な向上を目指して、審査対象をすべての工業製品へと拡大しています。

# 1970-



1984 小型乗用車 ホンダ シビック25i 3ドアハッチバック

本田技研工業株式会社 デザイン:株式会社本田技術研究所

アメリカ車でもヨーロッパ車でもない「日本の車」をめざして意欲的にデザインされたコンパクトカー。室内空間は広く、エンジン・サスペンションなどのメカニズム部分は小型化・高密度化を図る。この結果、台形のかたちをもつ居住性に富んだ車が生みだされた。

## 第3フェーズ

# 価値変化の時代

グッドデザイン賞が大きく刷新。デザインの領域もモノからコトへ。

1990年代前半のバブル崩壊に、1995年の阪神・淡路大震災、2001年のアメリカ同時多発テロ事件など。社会が混沌としていくなか、デザインの使命も変化していきます。

行政のスリム化を背景に通商産業省主催の<グッドデザイン商品選定制度>は1997年に終了、翌年に日本産業デザイン振興会主催の<グッドデザイン賞>として民営化されます。活動内容もよいデザインを見つけ、社会へ伝えていく方向へシフトし、デザインの概念もこれまでの「製品」限定から広げ、「新領域デザイン部門」や、「コミュニケーションデザイン部門」を新設。社会がその価値観を徐々に変化させたのと同時に、グッドデザイン賞もあるべき姿を変化させていきました。

# 1990-



1999 エンタテインメントロボット AIBO ソニー株式会社

デザイン:空山基+ソニーデジタルデザイン株式会社 熊谷佳明、土屋務、入部俊男

「人に愛されるインタラクション」が、最先端の人工知能と機械技術によって実現。「人と道具の関係はいかにあるべきか」について、一石を投じた事例であり、ここに見られる「人とモノとの新しい情緒的関係の創造」は、優れたデザインとして賞賛された。

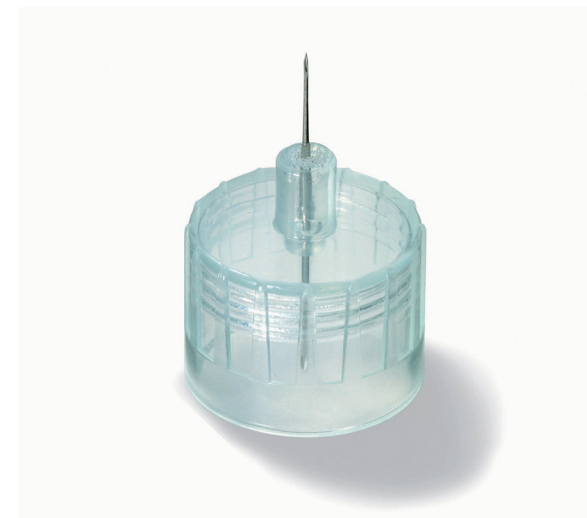
## 第4フェーズ

# 価値多様化の時代

変わり続けるデザインの概念

2000年代には情報通信技術(ICT)が急速に発展。グッドデザイン賞も2000年よりインターネットでの受付をスタート、海外からの応募が増加します。誰もが情報発信可能となった時代に、デザインの役割が変化するのは必至で、グッドデザイン賞の審査区分も従来の部門別から「身体・生活・産業・社会」の4領域へと再編成。新たに「サステナブルデザイン賞」や「フロンティアデザイン賞」が新設されました。また根源的なテーマとして「人間・本質・創造・魅力・倫理」の5つの言葉がグッドデザイン賞の理念に。ICTの発展とともに、グッドデザイン賞も供給側の論理から、生活者の視点から観察する需要側の論理へと大きく軸足を変えています。

# 2000-



2005 インスリン用注射針 ナノパス33 テルモ株式会社

デザイン:同社 マーケティング室 デザインチーム 坪田潤、井尻朋彦

糖尿病治療で使用されるインスリン注射用針。世界一細い0.2ミリ。従来より20%細い。痛くない細い針へのニーズと、薬剤を注入するための一定の太さの確保という相反する要素を、針の形状を漏斗状にするアイデアと、様々な生産技術の革新によって実現した。



## 共有時代 変わり続けるデザインのかたち



### 2016 本 東京防災

株式会社電通+NOSIGNER+株式会社電通テック+  
株式会社たき工房+株式会社ブレーションシップ+  
株式会社トランス・メディア+岡村優太

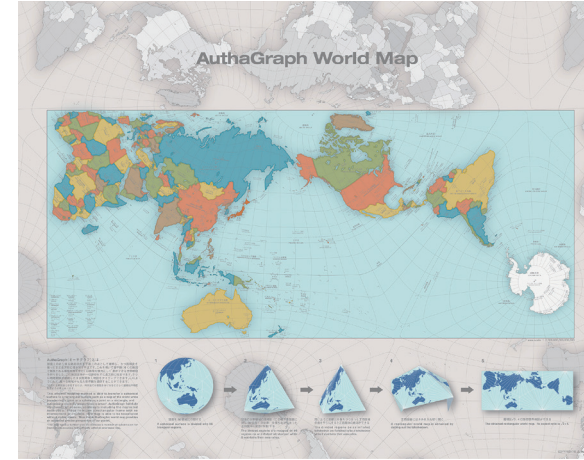
デザイン:株式会社電通 榎良祐、松浦夏樹、武田さとみ+  
NOSIGNER 太刀川瑛弼、長谷川香織、アンドラディティヤ、岡村優太

東京用の防災ガイドブック。面倒でつまらないと捉えられがちな「防災」情報を、「読みたい」と思わせるエンターテインメント性がある。発災から避難、生活再建までの流れをまとめたり、事前の備えを挙げるなど、情報の整理が徹底されてわかりやすく、統一のとれたイラストが親しみやすい。行政の「伝え方」を改善したものとして注目される。

### 今、何がよいデザインなのか？

2000年代に急速に発展したICTはさらにその進化の速度を速め、今やあらゆるものがネットワークで繋がろうとしています。世界のグローバル化も、加速の一途を辿っています。グッドデザイン賞においても、2008年のタイ王国「デザインエクセレンスアワード」に続いて、2012年にはインド「I Mark」、2014年にはシンガポール「SG Mark」など、国際的な協調をさらに広げています。

一方でソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の登場やクラウド技術の発達により、情報同士も繋がり、共有化されるようになってきています。こうした情報共有の流れは、オー



### 2016 世界地図図法 オーサグラフ世界地図

慶応義塾大学政策・メディア研究科+オーサグラフ株式会社

デザイン:慶応義塾大学政策・メディア研究所+オーサグラフ株式会社 鳴川肇+  
株式会社ビーグルサイエンス 星鉄矢

地球を平面上で表現するための、新しい地図図法。世界地図には面積、形、方位、距離の四要素があり、これまでの地図はどれかが大きく狂うものだったが、球体を多面体に変換したオーサグラフはどれも大きな違和感を出さないはじめての世界地図。全方位に無理なく延長できるので、多中心の世界観を視覚化するものにもなっている。

ブンスース開発やファブラボのように現実世界においても共有・協働という形に進化し、そのような活動が社会を動かす原動力となり始めています。グッドデザイン賞においても共有・協働の仕組みをどのようにして作り上げるかをひとつの課題と考え、その取り組みの一つとして2013年より応募者と審査委員が直接、情報を共有する「対話型審査」を導入しました。

このような状況下において日本ではひとつの大きな出来事が起こりました。それは2011年(平成23年)の東日本大震災です。あらゆる面で想定をはるかに超える出来事が起こりました。震災直後にはスーパーやコンビニエンスストアの商品棚から様々な商品が消え、夜景から電気の明かりも消えました。震災が引き起こした悲劇を目の当たりにして、「今、自分たちに出来ることは何か」「今、本当に必要なものは何か」と考えた人も多いでしょう。東日本大震災を通して、ひとつの大きな価値観の転換が起こったはずですが。

そしてこのことはグッドデザイン賞においても「何がよいデザインなのか？」を今一度考え直す契機となりました。これまでもグッドデザイン賞では「何がよいデザインか」を常に問いかけ続けてきましたが、価値観の転換が起こった今、もう一度

「グッドであること、そしてグッドデザイン賞の再定義」を行うタイミングに差し掛かっています。

近年、デザインはそれ自体が変化するとともに、社会におけるデザインのあり方も大きく変わってきています。身の回りのもののかたちだけではなく、「サービス」や「システム」といった「機能」の側面が生活の中に顕在化しつつあります。この中であって2016年グッドデザイン金賞受賞の「東京防災」のように、優れたデザインが、人々に社会問題を察知させるという現象も生まれています。今後はこうした視点からデザインの意義をとらえるニーズが高まるはずですが。

これからの時代にデザインが果たす役割はなにか。近年のグッドデザイン賞の受賞作を並べて見ると、多様化する社会問題を解決する意欲に満ちた作品が多いことに気づくはずですが。社会をより良くしていくべく、いかにして共有・協働の仕組みを形作っていくか。現代を生きる私たちには、多くの人の共感を呼ぶコミュニケーションの力も求められているのかもしれない。



### 2012 テレビ番組 デザインあ

日本放送協会

デザイン:岡本健(佐藤卓デザイン事務所)+阿部洋介(thu)+  
岡崎智弘(swimming)+ミズヒロ

「デザイン」という抽象的な概念をわかりやすく伝える子ども向けテレビ番組。十五分と短いプログラムながら複数のコーナーが設けられ、日常的に目にしているデザインを多角的に解説。デザインとは、人やモノをつなげたり、何かを解決するための知恵や行動であることを教えてくれる。映像や音楽、紹介する視点のユニークさは大人からの評価も高い。





## グッドデザイン賞審査委員に聞く 激動の社会で、変わるデザインの意義とは？

総勢80名を超える審査委員が選ぶグッドデザイン賞。審査過程はどんな感じ？また審査を通して浮かび上がる理想のデザインとは？  
現在そして次代のグッドデザインを見出す審査委員3人に、本音のホンネ、思うところを聞いてみました。

## まるで大学のゼミ合宿のよう!? 専門家も激論を交わす審査会

—「生活家電」「文具・ホビー」から、「モビリティ」「地域の取り組み・活動」まで、グッドデザイン賞には約20の応募カテゴリーがあります。各カテゴリーには専門の審査ユニットが設けられ、審査の過程では相当に熱い議論を繰り広げているそうですね。

**内田** そうなんです。私も初めてグッドデザイン賞の審査委員を務めた際には、新鮮な驚きを覚えました。新聞や専門誌でお名前を見たり、テレビでお姿を拝見するような方々が、まるで学生時代に戻ったかのように、いきいきと熱のこもった議論をしておられる。そこに参加できるのは、非常にエキサイティングな体験でした。

**鈴木** 僕もそうです。歴史のあるアワードということもあって、「ふむふむ、これはいいデザイン。僕たちがお墨付きをあげよう」なんて流れ作業のような、事務的な審査なのかと思っていたら、まったく対極のアプローチでした。デザインのプロが納得いくまで、時間をかけてじっくりと議論を積み重ねています。グッドデザイン賞ほど、専門家が議論に議論を重ねて審査をするアワードは、世界でも珍しいのではないのでしょうか。

**飯石** 本当にみなさん、真剣そのものですよ。私は2021年度からグッドデザイン賞の審査に参加し、地域の取り組み・活動を審査するユニットを担当しています。日本では中央集権型のヒエラルキー社会から自律分散型の社会に向かおうとする動きが浸透しつつある中で、毎年応募の数が増えているのがこのジャンルです。「地域の取り組み＝デザイン」というと、「なぜ取り組みが、デザインなの？」と不思議に思う方もいるかもしれませんが、「社会をよりよくする仕組みをデザインする」といえば、わかりやすくなるのではないのでしょうか。

この「地域の取り組み」というのは、「これ！」という定型がないので、家電や情報機器などの応募とは違って、プロダクト等の作品提出というよりは、取り組みそのものを提出するというケースの方が多いです。結果として、プロセスや成果などが書かれた大量の資料を読み込んだり、添付された動画を見たりして審査を進めますが、詳細が掴みきれない場合もあります。けれども私を含め、どの審査委員もあきらめません。『本業はそっちなけ？』と心配になるくらい、調査と議論を尽くして審査を進めています。



二次審査会の様子

**内田** グッドデザイン賞の審査をするうえで、下調べは欠かせない作業ですよ。私は今、モビリティを審査するユニットを担当していますが、以前は産業・医療機器のユニットを担当していました。でもそのときは医療分野を審査するというのに、誰ひとりとして医療の専門家がいなかったんです。応募対象の注射針について議論をする必要があるのに、注射器を扱ったことすらない人ばかりだった。でも経験がなければ、調べるしかない。みんな必死でリサーチしました。そして毎回、審査の過程で気づかされるんですよ、医療現場が直面する数々の問題に。グッドデザイン賞の審査は、私にとってかけがえのない学びの場となっています。

**鈴木** 自分のユニットの優れた作品を「グッドデザイン賞」として評価した後の審査プロセスを鑑みても、審査委員として、学びの機会はたくさん存在すると感じます。約20の審査ユニットの「グッドデザイン賞」の中から「グッドデザイン・ベスト100」の候補が持ち寄られ、そこから毎年さらに優れた100件が選定されますが、あらゆるジャンルの作品をカバーしているために、消しゴムから都市計画まで分野もスケールも異なる候補作が一堂に会します。そして、そこに込められたデザインの意義をみんなで読み解き議論していく。審査委員が自分の専門分野以外にも関心と問題意識を持たざるをえないのが、グッドデザイン賞の審査の興味深い点だと思います。

**飯石** そう！消しゴムと都市計画を同じ俎上で語っているのを見て、私は衝撃を受けました。しかも皆さん、ものすごく楽しそうに議論していますよね！

**内田** その“ごった煮”感こそが、グッドデザイン賞の醍醐味なのかもしれないですね。一人ひとりの審査委員が専門分野を越えて、一つひとつの作品の意匠の美、仕組みの利点を紐解き、議論せざるをえなくなるのです。私たち審査委員も、さまざまな分野のデザインとの出会いを楽しんでいます。





内田 まほろ

キュレーター  
JR東日本文化創造財団 高輪ゲートウェイシティ(仮称)  
文化創造棟準備室長

テクノロジー、アート、デザインが融合する領域で、国内外のイベント、展覧会といったプロジェクトに携わる。2002年から2020年まで日本科学未来館キュレーターを務め、文化庁在外研修員としてニューヨーク近代美術館に勤務した経験も。

一審査委員の方々が選んだ「グッドデザイン・ベスト100」から、今度は「グッドデザイン金賞」「グッドフォーカス賞」「ファイナリスト(大賞候補)」が選出されます。そして審査の大団円である「グッドデザイン大賞」は、「ファイナリスト(大賞候補)」の中から、審査委員とその年の「グッドデザイン賞」の受賞者などによって投票で選ばれます。応募の受付から大賞の発表に至るまで、6か月を要します。

**鈴木** プロ野球の1シーズンと、ほぼ同じスパンです。こんなに時間と人員、労力を割いているデザインアワードは、やっぱり世界でも他にないと思います。ちなみにグッドデザイン賞の上位賞に輝くためには「グッドデザイン・ベスト100」に選ばれる必要がありますが、各審査ユニットの専門家から「グッドデザイン賞」として評価された時点で十分すごいと感じます。その道のプロがじっくり作品と向き合って、選んだわけですから。

**飯石** そうですね。審査委員が太鼓判を押したのだから、自信を持っていただきたいです。

それとユニットごとに審査報告会を行うのが毎年のお約束ですが、私たちのユニットは審査委員だけではなく受賞者を招いてお話を伺いながら報告会をおこないました。「審査の過程や交わされた意見がリアルに伝わってきて、とても興味深かったです」と、参加した方からも好評でした。

一結果だけでなく、できれば審査の過程にも触れていただけるといいですね。グッドデザイン賞公式noteでもその一部を公開していますので、応募しようという方やデザインに興味がある方は、ご一読いただけると幸いです。

## 2021年度の審査会で話題となった これからのデザイン

一昨年度(2021年度)のグッドデザイン賞で、審査を進めるなかで、気になった作品はありましたか？

**内田** モビリティのユニットを審査しましたので、コロナ禍を意識せずにはいられませんでした。この2年間、人々は移動の意味、さらには離れた場所に出向いてまで働くことの意味を問い直さざるをえませんでした。そんななか、今回の審査では、移動販売車『deli+co』という作品に出会いました。

コロナ禍において移動販売者の数は増えていますが、実はその外見は既成の車を塗り変えたものがほとんどで、こうした車両が世に登場した40年前からほぼデザインの

傾向は変わっていません。『deli+co』がユニークなのは、建築技術に通じたデザイナーが販売する商材や乗るひとの思い、身長にまで配慮して、完全オーダーメイドで販売車を製作している点でした。フードや物品の販売だけでなく、限界集落や被災地の支援、コミュニティサービス、またフリーランスやクリエイティブ業種のノマドな働き方にまで思いを巡らせて提案された車両なので、これはもう家のようにもあり、職場のようにもあり、もちろん移動のツールでもあります。暮らしのさまざまな要素が渾然一体となったモビリティに、大いなる可能性を感じました。

**鈴木** 私は今回の審査を通して、日本の家電がいい意味で原点回帰しはじめていると感じました。本来、家電は日々の生活の道具なので、人々の暮らしを支えている黒子的な存在です。しかしいつの間にか他社との差別化といった、売り場での競争のためにデザインの力が使われるようになっていました、しかし最近では、使い勝手はもちろん、修理のしやすさ、リサイクル性など、より長い視点でデザインの力が発揮されはじめ、機能的で節度あるデザインが増えてきているように思います。

**飯石** 私が所属する取り組み・活動のユニットで注目を集めたのが、「グッドデザイン金賞」を受賞した『きたもっく』の循環型地域未来創造事業です。地域の林業を継続させるために、今や全国各地の自治体が頭を悩ませています。森林をそのまま放っておくと自然災害につながるけれど、林業の担い手は常に不足しているという現実があります。そもそも『きたもっく』のある群馬県北軽井沢エリアの山林には建材や家具材には向かない広葉樹が多く、林業従事者が少なかったそうです。

「きたもっく」の取り組みで地域の林業のため行ったことは、今から28年前の1994年に全宿泊施設に薪ストーブが入ったキャンプ場を作るということでした。これが「キャンプ = 夏」との常識を見事に覆して、年間10万人を集客する人気施設に変貌を遂げました。必然的に薪の需要が



木は先端から根本まで適所に価値化、森林を養蜂で価値化するなど、地域資源を多面的にまるごと活用する『きたもっく』の取り組み



鈴木 元

プロダクトデザイナー  
GEN SUZUKI STUDIO代表

英ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、デザインプロダクツ科修了。パナソニック株式会社、IDEOロンドン、ボストンオフィスを経たのちに会社設立。IDEA賞金賞、GERMAN DESIGN AWARD金賞など受賞多数。多摩美術大学非常勤講師なども務める。



飯石 藍

都市デザイナー  
公共R不動産コーディネーター

メディア「公共R不動産」にて、クリエイティブな公共空間活用に向けたプロセスデザイン、リサーチ、自治体との事業推進などに携わる。また豊島区のグリーン大通りと南池袋公園にて、公共空間活用を通じたエリア価値向上プロジェクトなども推進中。



移動販売車『deli+co』はオーナーの思いや商材、身長に合わせて最適なレイアウトやデザインで製作される





増え、地域の山林資源を効率的に伐採して生かせるようになりまし。そこで生まれた人とお金の流れが、今度は遊休山林や耕作放棄地での養蜂事業に波及します。今では『きたもっく』はキャンプ場と林業だけでなく、薪ストーブや暖炉、ボイラーの施工・販売、建築・リフォーム業なども手がけて、地域に新たな雇用を生み出しているんです。

## 社会をよりよくなる グッドデザインとは

一お話を伺っていると、ひとことにデザインといっても、さまざまなアプローチがあると気づかされます。だからこそ、グッドデザイン賞が対象とする領域は広いのです。

**飯石** 先ほど私は地域の取り組みに関して、『社会をよりよくなる仕組みをデザインする』という言葉を用いましたが、これは広義のデザインの概念に基づいています。グッドデザイン賞の草創期においては、家電や自動車といったプロダクトの機能や美しさ等がおもな審査の対象でした。しかし日本社会が成熟期を迎えて社会の問題が多様化するなかで、それらの問題の背景をリサーチして解決するソリューションもデザインとして捉えられ始めました。“狭義のデザイン”だけでなく、“広義のデザイン”にも注目が集まるようになったのだと思います。

**鈴木** 僕も飯石さんの意見に同感です。プロダクトデザインの仕事もソリューションづくりと同じで、社会的背景の分析と切っても切れない関係にあります。仕組みづくりとものづくりには共通点が多く、グッドデザイン賞の評価対象となるのは必然だったと思います。たとえば1970年代のスーパーカーのブーム。当時の人々は見たこともないシルエットとカラーリングの車体、高出力で高性能なエンジンの馬力に憧れを抱きました。でも今ではスーパーカーという言葉さえ、日常生活ではほとんど

耳にしなくなっています。今ではスーパーカーに乗るよりも、自転車に乗るほうがかっこよく見えるかもしれない。私たちが何かを美しいと感じる背景には、分析しきれない膨大な情報が折り重なっています。プロダクトデザインは「狭義のデザイン」と思われがちですが、デザインの細部と、それをとりまく社会や時代と実はひとつに繋がっているのです。

**内田** 私はキュレーターとしてアートやデザイン、また18年間『日本科学未来館』に在職していたために、サイエンスやテクノロジーといった分野の作品にも触れてきました。そこで気づいたのが、デザインはサイエンスやテクノロジーと親和性が高いということです。

海外では、デザイン学科が工学部に所属していることも多く見られます。この点を鑑みても、デザインはテクノロジーやサイエンスと同じく、ソリューションを生み出すものです。手段として機能するためには、論理的な仕組みが必要になってきます。しかし同時に多くの人々が歓迎できるように、共感を呼ぶかたちを持たなければなりません。

**鈴木** 時代を代表する優れたプロダクトやサービスは、必ずひと目で多くの人に好意や共感を抱かせる「何か」がありますよね。過去の「グッドデザイン大賞」の受賞作を振り返ってみても、そこは共通しています。

**内田** 私は常日頃から思っているのですが、グッドデザイン賞って、海外のミュージアムに似ているんです。日本では、たとえば『ゴッホ展』のような著名な画家の大規模展を開催することが、ミュージアムの役割として華々しくメディアで取り上げられていますが、海外では事情が異なります。ミュージアムは、社会に対して問題提起できる場所なんですよ。

**飯石** 内田さんのその言葉を聞いて、審査副委員長の齋藤精一さんの「グッドデザイン賞は社会の鏡でもある」という発言を思い出しました。この言葉は、地域の社会問題の解決に取り組んでいる私にとっては、共感できるとともに考えさせられるものでもありました。

**鈴木** 齋藤さんのその言葉は興味深いですね。たしかにグッドデザイン賞の受賞作品を眺めれば、なんとなくその年に話題になったモノや社会問題が記憶によみがえってきます。分野の異なる専門家が議論を尽くして審査しているからこそ、自然と社会を映し出すのでしょね。

**内田** そして、必然的に毎年の社会動向のまとめにもなっていたグッドデザイン賞が、問題提起の場所になった契機は、2018年度のグッドデザイン大賞『おてらおやつクラブ』だったと思います。

**鈴木** 僕もそう思います。キャッチーな名称の裏側には、根の深い社会問題を解決したいとの思いが隠されていました。

**内田** 貧困家庭を救うべく、お寺のおそなえをおそ分けする仕組みをつくる。生活に困った人やマイノリティを救おうという取り組みが「グッドデザイン大賞」を受賞したのは、『おてらおやつクラブ』が初めてでした。家庭の貧困という深刻な社会問題をなんとか解決したい。受賞者と審査委員が大賞にこめたメッセージは、例年にない特別なものでしたが、目指そうとしていることはまさにデザインの本質だったのではないかと思います。

**鈴木** 行きどころを失っていた全国のお寺のおそなえものが、継続的に貧困家庭へ届けられるシステムを作ること。『おてらおやつクラブ』の取り組みでは、既存のものを調整してうまく循環させています。現状を少し変えることで、淀んでいたものがずっと流れ始める。問題へのアプローチ方法も極めてデザイン的だと感じました。

**飯石** あとはネーミングセンスが秀逸ですよね。同じような取り組みは今までにもあったかもしれませんが、たとえば『子ども救済センター』ではなく、『おてらおやつクラブ』と言われると、私にも何かできるんじゃないか、いや何かしたい、という前向きな気持ちになれます。

**鈴木** 反対にネーミングひとつで、コミュニケーションを止めてしまうこともありますよね。『おてらおやつクラブ』はロゴや冊子といった広報ツールのつくりもよくできています。本当にすべてが絶妙なバランスで成り立っていて、できそうでなかなか実現できないことをやってのけています。素晴らしいデザインだと思います。

## 社会が激動する今こそ デザインの力が試されるとき

一その「おてらおやつクラブ」の受賞から4年経ちました。先ほど内田さんが指摘されたように、この間に新型コロナウイルスの世界的大流行がありました。今後も激動する社会でデザインが機能するために、どんなことが必要でしょうか？

**内田** 今まで常識だと思っていたことを考え直す時期に差し掛かっています。60歳定年制や、従来の家族制度を基本としていては、立ち行かないのが日本の状況です。またコロナ禍で移動や働き方の概念も変わっています。そんななか、2021年度のグッドデザイン大賞『遠隔勤務来店が可能な「分身ロボットカフェDAWN ver.β」と分身ロボット「OriHime」』は、分身ロボットを介して離れた場所で身体労働をおこなえる仕組みを提供しています。新たな移動、働き方のかたちです。世の中が大きな転換期にある今だからこそ、ソリューションとしてのデザインが求められています。

**鈴木** 人類が取り組まねばならない最も大きな問題が環境問題です。資源を過剰に使って生産、廃棄する時代はもう過去のことです。そしてデザインが、そのお祭り騒ぎの片棒を担いでいたのもまた事実です。これからは地球と人類にやさしい経済へ舵を切るべく、デザインにも「ほどよさ」が求められます。決して禁欲的であれ、と言っているわけではありません。持続可能な社会につながる心地よさ、ほどよさが必要なのです。

環境問題は簡単には解決しません。まずは日々の生活での違和感を正すことから真剣に始めて、それがいつか大きな問題解決の糸口になればと考えています。

**飯石** 私も現在の社会が転換点に差し掛かっていると感じています。そして今の資本主義と対極にあるのが、『きたもっく』が実践するような、もともとある資源をうまく活用することです。そうして小さなお金の流れを生み出せば、その循環が次のスタンダードになるかもしれません。そのためには、まず自分の周囲を見つめ直すこと。鈴木さんの言葉にあったように、日々の生活の違和感を真剣に正すことが必要なのだと思います。世の中を変えるデザインは、案外そういう身近な場所から生まれるのかもしれない。



「おてらおやつクラブ」は、イラストやロゴの親しみやすい雰囲気も審査委員に評価された



「おてらおやつクラブ」の主たる活動は、全国の支援団体の協力をとお寺のおそなえを貧困家庭に届けること



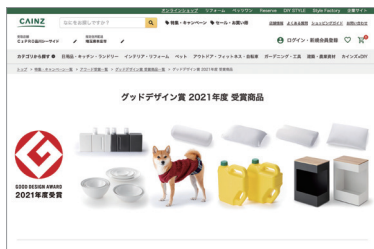
社会の問題を  
解決できるからこそ  
デザインはその鑑でも  
あるんだね



# 応募の流れ

- 1 応募受付** 4月～5月頃  
応募はWEBサイトで受け付けます。受付期間中に、審査の視点セミナーやオンライン個別相談会を実施しています。  
[www.g-mark.org](http://www.g-mark.org)
- 2 一次審査(書類審査)** 6月頃  
応募時にWEBサイトで登録された情報をもとに審査をおこないます。  
[一次審査料] 11,000円(2022年参考)
- 3 二次審査(現品審査)** 8月頃  
一次審査を通過した対象は現品での二次審査に進みます。二次審査会は例年7～8月に3日間実施されます。審査会場に展示できない対象は説明パネルなどの資料で審査をおこないます。  
[二次審査料(一次審査通過者)] 58,300円(2022年参考)
- 4 受賞発表** 10月頃  
WEBサイトにてグッドデザイン賞、グッドデザイン・ベスト100等を発表します。10月初旬の受賞発表から約1ヶ月間はGマークを無料でご使用いただけます。  
[受賞パッケージ料(二次審査通過者)] 88,000円(2022年参考)
- 5 受賞展・受賞祝賀会** 11月頃  
東京・六本木の東京ミッドタウンで、グッドデザイン賞受賞対象を展示します。会期中にはグッドデザイン賞の受賞祝賀会も開催します。受賞年鑑は翌年3月に発刊されます。  
[Gマーク使用料(任意)] 220,000円/1年より(2022年参考)  
○二次審査、受賞展の基本費用で、サイズや出品内容によるオプション料は含まれません ○Gマーク使用料には、公的機関は無料、中小企業は50%割引などの割引制度も設けています ○費用は変更になる場合があります ○金額はすべて消費税込みです

## 受賞メリット 受賞すると以下のようなメリットがあります。



### Gマークの使用

受賞の証として「Gマーク」を使用することができます。Gマークは、「よいデザイン」として認められたもののみが付けられるマークであり、この社会的価値は大変高く認知され、生活者の方々に広く親しまれています。



### オンラインギャラリーと年鑑への掲載

受賞作品はオンラインギャラリーに審査委員の評価コメントとともに永久登録され、世界中から閲覧が可能になります。また、作品ごとに表彰状が贈呈され、受賞年鑑に掲載されます。



### 各種イベント・媒体での露出

受賞作品を紹介するオンラインイベントや特設会場での展示の実施、SNSへの掲載などによるグッドデザイン賞の発信するPRに加え、テレビ・雑誌などの特集や小売店での販売、海外の展覧会への出品など、幅広い形で露出機会が広がります。

## GOOD DESIGN Marunouchi



デザインと社会をつなぐ最前線の交流拠点として、2015年10月に東京・丸の内開設したコミュニケーション・スペース。展示やセミナー、トークイベント、ワークショップなど、グッドデザイン賞を受賞した方々を中心に様々な企画を実施しています。

## GOOD DESIGN STORE TOKYO by NOHARA



グッドデザイン賞受賞商品の販売を主体としたグッドデザイン賞の常設の販売・発信拠点です。日本のデザインの魅力や可能性を対外的に発信し、日本のプレゼンス向上を目指しています。  
(運営:野原ホールディングス)

## お問い合わせ

公益財団法人日本デザイン振興会 グッドデザイン賞事務局  
E-mail: [info@help.g-mark.org](mailto:info@help.g-mark.org)

詳細は

[www.g-mark.org](http://www.g-mark.org)

